

ヴァレリー・ラルボー： 『アレン』と同郷の作家たち

佐藤 みゆき

[キーワード：①ブルボネ地方 ②シャルル＝ルイ・フィリップ ③エミール・ギョーマン ④コスモポリチスム ⑤同郷]

はじめに

ヴァレリー・ラルボー (1881–1957) が「ノート」を付した作品は1929年に決定版を刊行した *Allen* (『アレン』) のみである¹⁾。彼は故郷ブルボネ地方を題材にした『アレン』の本編を1927年に月刊誌 *La Nouvelle Revue Française* (『新フランス評論』) に二号にわたり掲載した後、1929年に創作過程の説明や構造などを解説した「ノート」および「読者への序文」を加えた²⁾。この「ノート」は作品への注釈のみならず、ラルボーの創作活動の源泉を知るための資料としての価値を持つ。その一例が本稿で取り上げる同時代の同郷の作家たち、Charles-Louis Philippe (シャルル＝ルイ・フィリップ、1874–1909)³⁾ や Émile Guillaumin (エミール・ギョーマン、1873–1951) の存在である。

ラルボーは一般的に *cosmopolite* (国際人) として評されており、これまでの研究において彼とコスモポリチスムとの関係は長く検討されてきた。生まれ育ったフランス中部の街 Vichy (ヴィシー) はナポレオン三世の頃から各国の観光客の集まる名だたる温泉地であり、彼自身も幼少の頃から療養を兼ねた外国周遊を常とし、また多様な国籍の生徒が集

まる寄宿学校で学んだ様子は、*Fermina Márquez* (『フェルミナ・マルケス』、1911) や *Enfantines* (『幼なごころ』、1918) など複数の作品に反映されている。さらに後年ラルボーが欧米各国の作家との交流を深め、特に *Walt Whitman* (ウォルト・ホイットマン、1819–1892) の詩に触れ、*James Joyce* (ジェイムス・ジョイス、1882–1941) をはじめとする外国文学の翻訳に取り組んだことは、よく知られていることである。これらの経験がラルボーの視野を広げ、「ヨーロッパは一つ⁴⁾」という感覚を育んだと言えよう。同時に彼には故郷を「流刑地」や「墓場」と呼んでいた時期があったことが『アレン』の中で明かされていることにも留意しなければならない⁵⁾。

その『アレン』において、ラルボーは故郷である *Bourbonnais* (ブルボネ地方：フランス中部、現在の *Allier* [アリエ県] に相当) を史実や地元の作家の活躍ぶりを引用して讃えている。彼が「ノート」の第5章 « *V. Sources d'Allen* » (『アレン』の源泉) で述べたとおり、作品の創作過程には郷土の歴史家 *Achille Allier* (アシル・アリエ、1807–1836) の三巻の歴史書 *L'Ancien Bourbonnais* (『旧きブルボネ』、1833–1838) が大きな影響を与えているが⁶⁾、『アレン』に見られる故郷への評価を鑑みたま時、本編においても「ノート」においても同郷の作家たちの存在に幾度も触れていることは注目すべき事柄である。

そこで本稿では、シャルル＝ルイ・フィリップとエミール・ギョーマンとの交流を通して、ラルボーの故郷とコスモポリチスムとの関係を考えることを目的とする。「コスモポリチスムの旗手」として注目を集めてきたラルボーの故郷に対する認識を、『アレン』のテキスト及び二人と交わした書簡を用いながら考察したい。

1. シャルル＝ルイ・フィリップへの追悼

ラルボーとフィリップは、フィリップと同じ高校 (*Lycée de Moulins*)

に通うラルポーの終生の友人 Marcel Ray（マルセル・レイ、1878–1951）⁷⁾の紹介によって1906年の秋に知り合った。フィリップはアリエ県の小さな町 Cérilly（セリイ）の、つましい木靴職人の息子であった⁸⁾。二人には短篇を創作する作家という共通点があると同時に、ラルポーが『幼なごころ』で彼の実生活と同様に裕福な家庭の子女を主人公にしていることに対し、フィリップが1908年9月6日から1909年9月23日にかけて日刊紙 *Le Matin*（「ル・マタン」）に連載した短篇で地元セリイに暮らす貧しい庶民の日常生活の様子が描いている点において対照的な存在でもある。

また二人はすぐに親しくなったわけではなく、1908年にラルポーが『A. O. バルナブース全集』の全身である *Poèmes par un riche amateur, ou Œuvres françaises de M. Barnabooth*（『裕福な好事家の詩、あるいはバルナブース氏によるフランス語の作品』）で主人公の大富豪バルナブースの豪華な生活を描いた時の、フィリップからラルポーへの書簡には両者の経済格差が作品にもたらす影響についての反発も見られる⁹⁾。しかし同じ頃の André Gide（アンドレ・ジッド、1869–1951）の日記（1908年7月28日）によれば、フィリップはラルポーについて、友人でベルギーの作家で『新フランス評論』の創刊者の一人でもあった André Ruyters（アンドレ・リュイテルス、1876–1952）に、「横に並べばさすがのジッドも貧乏に見えるような人間に出会うと、僕はいつも愉快になるよ」¹⁰⁾とも述べたようである。

一方ラルポーは学校の先輩であるだけでなく人生においても作家活動においても先達であるフィリップに全幅の尊敬を寄せていた。フィリップがトルストイやドストエフスキーなどのロシア文学やディケンズやハーディなど英文学の翻訳を好み¹¹⁾、またラルポーに未知の作家の存在を教えたことは、ラルポーの外国文学の翻訳への傾倒や、世に知られていない作家の紹介への精力的な取り組みといった後年の創作活動に影響を与えたのである。

しかしフィリップが1909年12月に35歳の若さで早世したため、二人の交流は三年ほどに過ぎなかった。セリイでのフィリップの葬列に並んだラルポーは翌年一月、雑誌 *La Phalange* (『ラ・ファランジュ』) にファルグへの追悼文 « In Memoriam » を掲載し¹²⁾、以前からフィリップの作品 *La Mère et l'enfant* (『母と子』、1900) や *Le Père Perdrix* (『ペルドリ爺さん』、1902) など、パリで発行された新聞 *Le Matin* (『ル・マタン』) に連載した短篇の舞台であるブルボネ地方で彼とともに休暇を過ごしたいと計画していたが、それがフィリップの棺の前での実現となったことを悔やんでいる。さらに1911年4月27日にフィリップについてアリエ県の県庁所在地 *Moulins* (ムーラン) の市役所で講演しており、その内容が *Ce vice impuni, la lecture : Domaine français* (『罰せられざる悪徳・読書：フランス語の領域』) に収録されている¹³⁾。この後もラルポーは亡くなったフィリップの作品の評価を高めるために尽力し、遺作の刊行に奔走したのである。

さて『アレン』においてフィリップはブルボネ地方の「精神上の君主」のひとりとして紹介されている。ブルボネ地方は1327年から1527年までの二百年間ブルボン公が独自に支配した地域であり、その間ブルボン国家はフランス王国と並存していたため王権や軍事力の干渉を受けることがなかったが、こんにち故郷は過去の栄光を失ったフランスの一地方に過ぎない。しかしラルポーは『アレン』の中で、フィリップら同郷の作家たちの活躍を再提示するのである。

そしてひとたび独立が失われてからも、私たちには世界の^{ひのき}檜舞台で我々を代表する精神上の君主たちがなおもいたのだ。ブレーズ・ド・ヴィジュネール、ジャン・ド・ランジャンド、そして最近ではテオドル・ド・バンヴィルとシャルル＝ルイ・フィリップだ¹⁴⁾。

このようにラルポーはまずフィリップを紹介した後に、『アレン』の本

編を解説した「ノート」の第18章でブルボネ地方の地名 Chantelle（シャンテル）の旧名を取り上げた章 « XVIII. Cantilia »（「カンティリア」）を設け、雑誌 *La Revue du Centre*（『サントル評論』）に寄せた紀行文¹⁵⁾を引用・再掲する中で、シャンテル訪問時の様子をフィリップの『ペルドリ爺さん』を例に挙げて説明している。

私たちは居心地が悪く、嫌になるほど場違いで、よそ者で、それでいて目立っていて、しかも通俗だと感じた。私たちも、シャンテルの住人のように、喪服を着ればよかった。粗末な喪服や味気ない略喪服には、何も通らない街道に観念したようにへばりついている大きな村の陰気さ、空の寂しさと田園の静寂との間に押しつぶされた町外れだけが似合うだろう——フィリップが『ペルドリ爺さん』の中で仔細に描いたブルボネ地方の小さな町のあきらめや手の施しようのない貧しさのような！ ——あの城が、いやむしろムーランの領主の窪地の青の中に堂々とそびえ立つシャンテル公の城の亡霊だけが似合うのかもしれない……¹⁶⁾

また第20章では、本編で触れなかったフィリップの生まれ故郷 « XX. Cérilly »（「セリイ」）を取り上げている。

私が『アレン』で紹介したかった名前がもう一つある。とはいえシャルル＝ルイ・フィリップやマルセラン・デブータン、それから、その名を「精神的君主」のリストに挙げるべきだった地理学者で探検家のフランソワ・ペロンの生まれ故郷として良く知られているのだが¹⁷⁾。

『アレン』はプレイヤード版で五十ページほどの短篇であるが、このようにラルポーはフィリップの人柄、作品、出身地への敬意をブルボネ地方との関わりとともに示したのである。

2. 農民作家エミール・ギョーマンとの交流

さて、フィリップは農民作家として知られるエミール・ギョーマンの友人でもあり、ラルポーはフィリップの紹介で1907年にギョーマンとパリで出会った¹⁸⁾。ギョーマンはフィリップの出身地セリイの隣村 Ygrande (イグランド) に生まれ、農業を営む傍ら創作に励んでいた。1904年に出版した *La Vie d'un simple* (『ある百姓の生涯』) でゴンクール賞を逃したものの、すでに作家として田園小説集 *Dialogues bourbonnais* (『ブルボネの対話』、1899) や *Les Tableaux champêtres, Scènes de la vie rurale en Bourbonnais à la fin du XIX^e siècle* (『農村の風景：ブルボネ地方における十九世紀末の田園生活情景』、1901) などを出版していた¹⁹⁾。

フィリップが亡くなった時には揃ってセリイでの葬儀に参列し、そこでギョーマンは弔辞を述べ、また彼は翌年『新フランス評論』2月15日号に « Philippe en Bourbonnais » (「ブルボネ地方のフィリップ」)²⁰⁾ を寄稿している。さらにギョーマンは1935年に Société des Amis de Charles-Louis Philippe (シャルル＝ルイ・フィリップ友の会) が設立された時には会長となり、1942年にフィリップの生涯や創作活動をまとめた *Mon compatriote Charles-Louis Philippe* (『わが同胞シャルル＝ルイ・フィリップ』、Grasset 社刊) を出版した。

このようにラルポーとギョーマンが親交を結んだ背景にはフィリップの存在があったのだが、二人の交流の様子を知るにはシャルル＝ルイ・フィリップ友の会の会報 *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe* に1957年から1966年に渡って掲載された、1909年から1933年までに断続的に交わされた書簡が参考になる²¹⁾。例えば、1911年にラルポーは『フェルミナ・マルケス』を、ギョーマンは *Baptiste et sa femme* (『バプテスト教会信者とその妻』) を刊行したが²²⁾、その前年にラルポーは Fasquelle 社から出版の約束を取り付けたことをギョーマンあての手紙

で報告するとともに、「私たちは1911年のゴンクール賞の候補者になるでしょうが、どう思われますか？」と尋ねるなど、創作活動を通したやり取りを確認できる²³⁾。

『アレン』においてギョーマンは「われらがエミール・ギョーマンの書物は、ドイツやイギリスの生徒たちのフランス語の教科書になっているのだ²⁴⁾」との記述によって現れるが、二人の書簡のうち、『アレン』出版当時のものは1927年に書かれた合計四通である。まず2月27日にギョーマンはラルポーから『フェルミナ・マルケス』を贈られた礼を述べた後にラルポーの活躍を讃え、「ブルボネ地方にはあなたを誇りに思う権利があります！」²⁵⁾と書き送っている。この頃ラルポーは『新フランス評論』の2月1日号と3月1日号に『アレン』の本編を二度に渡って掲載しており、また3月27日には Othon Coubine（オートン・クービーネ）の挿絵を入れた版を限定120部で出版していた²⁶⁾。ラルポーは同年4月9日付のギョーマンへの手紙において次のように述べている。

お言葉ありがとうございます。あなたにこの『アレン』の限定版を是非ともお送りしたいと思っていました。これは私の精神における、ブルボネ地方での私の経験の精華、またブルボネ地方に敬意を表した作品であり、そしてそこに貴殿を取りあげさせていただいたからです。さらに現在120部の豪華版を作っており、版元から14部の非売品、記名入りのものを入手しました。そのうち一部はあなたの分です。4月20日までにはお送りしたいと存じます²⁷⁾。

書籍を受け取ったギョーマンは5月18日にラルポーに対し、ラルポーに会えず残念だと述べた後に『アレン』を献呈された喜びを表している。

とにかく私には『アレン』拝受のご連絡をするという最低限の義務を延ばすことはもうできません——何とも見事な装丁の。もちろんこれ

私がこれまで手にしたことのない最も美しい本です——まさに
思いがけないことです。私の貧弱な蔵書になんと輝かしいご褒美
をいただいたことでしょう！　そしてあなたからのこれほど貴重なお
品に、私は感謝の気持ちの申し上げようもありません！²⁸⁾

この後ラルボーは1929年にブルボネ地方の版画家 Paul Devaux (ポー
ル・デュヴォー、1894–1949) の挿絵を入れた新たな版の準備に取りか
かり、編集者からの依頼で本編の解説である「ノート」を執筆し、『ア
レン』創作の源泉となる事柄や作品の構成などとともにブルボネ地方の
歴史や地元の言葉などを紹介した。『アレン』においてラルボーがブル
ボネ地方の文学者としてランジャンドやアリエを高く評価していたこと
は先に触れたとおりであるが、そこにラルボーと同世代のフィリップや
ギョーマンとの創作上の結びつきを示すことはラルボーの他の作品には
見られない特長の一つである。そしてラルボーはこの最終章を次の言葉
で結んでいる。

私は『アレン』を、まずは私の同郷の人たちに、彼らのために書いた
本として捧げることができるだろう。そうすることで、この本を、私
の名前とともに、彼らの記憶に残せると思うのです²⁹⁾。

このように、郷土の歴史を下敷きにしながらブルボネ地方の復権をうた
う『アレン』に、同時代かつ同郷の作家たちとの交流の中で育まれてき
た一面を見ることができるのである。

おわりに

「アレン」(« Allen ») とは « All One » を意味する、14世紀にブルボン
公ルイ二世が創設した騎士団の標語である。本編においてはムーランを

目指す登場人物たちの合言葉であり、かつ本編がラルポーの道程の精髓であることを示している。さらにラルポーの「全て」として「ノート」を評価し活用することは、ラルポー研究に新たな可能性を与えるであろう。その一例が本稿で取り上げたフィリップとギョーマンとの親交である。

フィリップはパリ市役所の事務職員として、またギョーマンは農民としての仕事の傍らに作品を書いた。彼らはラルポーとは異なる生活環境にあり、それは彼らの作品が「*littérature prolétarienne*」（「プロレタリア文学」）として評価されている点からも明らかであるが³⁰⁾、『アレン』には出自も作風も異なる作家たちとの交流の様子が「同郷」という共通点のもとに示されている。ラルポーが「ノート」の第8章「*VIII. Conception et maturation*」（「構想と成熟過程」）で述べた『アレン』を「描写的なガイドでも田園小説でも、あるいは『田舎の風俗』でもない——もっと言えば歴史小説でも短篇シリーズでもない」³¹⁾ 作品にしようとする取り組みには、故郷に暮らす人々を描くフィリップやギョーマンへの敬意が見られるからである。

本稿で触れたのは限られた交友関係における「同郷意識」である。しかしラルポーにとっての「同郷」がブルボネ地方のみを指すものであることが明らかになったのではないだろうか。ラルポーには郷里を嫌悪し、パリや外国へ居場所を求めている時期があったが、同時に彼が常に同郷の作家たちと共にいたこともまた確かなことなのである。すなわち『アレン』におけるラルポーのコスモポリチスムとは、ブルボネ地方とその他の地域や国々とを分断した対立関係にあるのではなく、並存することによって成り立っているのである。

註

- 1) 本稿では底本に Valéry Larbaud, « Allen » in *Œuvres*, préface de Marcel Arland, Commentaires et notes par G. Jean-Aubry et Robert Mallet, Essai de bi-

- bliographie chronologique par Jacqueline Famerie, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade, 1958 を使用し、以後 *Pléiade* と略記する。
- 2) Valery Larbaud, *Allen*, orné de bois originaux en couleurs par Paul Devaux, Paris, Chronique des lettres françaises, Horizons de France, 1929. この版は2月に限定650部で刊行された。なお誤植などが最も少なくラルボーが「決定版」と称した版は、同年6月10日に Gallimard 社より出版された。
 - 3) フィリップの作品は Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes*, 5 tomes, édition présentée et établie par David Roe, Moulins, Ipoméé, 1986 に収録されており、また書簡等の資料をヴィシー市立図書館 Médiathèque Valery Larbaud の Fonds patrimoniaux Charles-Louis Philippe が所蔵している。
 - 4) « There is a country Europe », Valery Larbaud, *Journal*, éd. définitive, texte établi, préfacé et annoté par Paule Moron, Paris, Gallimard, 2009, p. 661. (原文英語)
 - 5) « [...] pendant longtemps j'ai détesté ce pays. Je l'appelais l'Exil, la Réclusion, la Thébàide, le Sépulcre. », *Pléiade*, p. 754. (本稿における下線強調はすべて論者による)
 - 6) Achille Allier, *L'ancien Bourbonnais (histoire, monuments, mœurs, statistique)*, 3 tomes, Moulins, Desrosiersfils, 1833-1838. « Ma source directe, pour l'explication que l'Éditeur donne touchant *Allen*, avait été Achille Allier, que j'ai suivi presque partout où il est question de l'histoire du Bourbonnais dans *Allen*. », *Pléiade*, p. 764.
 - 7) レイの父親がかつてラルボーが通っていた L'école Carnot de Vichy の校長だったことから、ラルボーは母親の引き合わせによって1894年にレイと出会った。当時ラルボーは13歳、レイは16歳である。二人の交流は終生続き、現在三巻の書簡集が刊行されている。Cf. *Correspondance 1899-1937, Valery Larbaud, Marcel Ray*, 3 tomes, introduction et notes de Françoise Lioure, Paris, Gallimard, 1979-1980.
 - 8) 東海麻衣子氏は博士論文『シャルル＝ルイ・フィリップにおける「時」・「時間」・「時間意識」の考察』（広島大学、2009年）の「序章」で、今日の文学史においてフィリップが「貧しい木靴屋の息子が文学者となった」、あるいは作品のテーマに貧困や病、貧者の厭世感などに基づく人間愛が見られることから「ポピュリズムの先駆者」として評価されるにとどまっていることに対し、フィリップは国家奨学生としてリセで学ぶなどの現代教育を受けており、また彼の早世とその後の二度の世界大戦による価値観の変化が彼に対する正当な評価の定着を妨げたと述べている。
 - 9) Cf. « Lettres à Valery Larbaud (du 8 juillet 1908) », in *La Nouvelle Revue Française*, Paris, Gallimard, 1^{er} août, 1939, n° 311, pp. 279-281.

- 10) « Parlant de Valery Larbaud, Philippe disait à Ruyters : “Ça fait toujours plaisir de rencontrer quelqu’un auprès de qui Gide paraît pauvre.” », André Gide, *Journal*, t. 1, 1889-1939, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1951, p. 269.
- 11) ラルポーが雑誌『ラ・ファランジュ』に Thomas Hardy（トーマス・ハーディ、1840-1928）の叙事詩劇 *The Dynasts*（『霸王』、1903-1908）の批評を寄稿したことはフィリップの影響の一例である。Cf. « *Les Dynastes de Thomas Hardy* », in *La Phalange*, n° 28, 15 octobre 1908, pp. 321-328.
- 12) Valery Larbaud, « Charle-Louis Philippe, In Memoriam », in *La Phalange*, n° 43, janvier 1910, pp. 193-195.
- 13) Cf. « Charles-Louis Philippe », in *Ce vice impuni, la lecture : Domaine français, Œuvres complètes de Valery Larbaud*, t. 7, Paris, Gallimard, 1953, pp. 284-311.
- 14) « Et même une fois notre indépendance perdue, nous avons eu encore des ducs spirituels qui nous avaient représentés sur la scène du monde : Blaise de Vigenère, Jean de Lingendes, et plus près de nous Théodore de Banville et Charles-Louis Philippe. », *Pléiade*, p. 755.
プレーズ・ド・ヴィジュネールはアリエ県 Saint-Pourçain（サン＝プルサン）生まれの外交官（1523-1596）、ジャン・ド・ランジャンドはムーラン生まれの詩人（1580頃-1616頃）。ラルポーは『アレン』執筆と同時期に「Notes sur Jean de Lingendes」（「ジャン・ド・ランジャンドに関する覚え書き」、in *Chronique des lettres françaises*, juillet-août 1927, pp. 500-508）を執筆し、ランジャンドの復権をはかった。現在「Jean de Lingendes」として *Ce vice impuni, la lecture : Domaine français, Œuvres complètes de Valery Larbaud*, t. 7, *op. cit.*, pp. 143-166 に収録されている。テオドール・ド・バンヴィルはムーラン生まれの詩人（1823-1891）。
- 15) Cf. Valery Larbaud, « Chantelle », in *La Revue du Centre*, mai-juin 1927, pp. 85-87 (avec des bois de Paul Devaux).
- 16) « Nous nous sentons dépaysés, fâcheusement étrangers, touristes, et voyants, et vulgaires. Nous devrions, comme les habitants de Chantelle, être en deuil. Un deuil pauvre ou un demi-deuil maussade seraient seuls en harmonie avec la tristesse du grand village désespérément accroché à la route où rien ne passe ; avec ses faubourgs écrasés entre la solitude du ciel, et le silence des champs, — comme Philippe, dans le Père Perdrix, a bien exprimé l’abandon et l’irréparable pauvreté de ses faubourgs des petites villes bourbonnaises ! — avec le château, ou plutôt le spectre du château ducal de Chantelle qui se dresse triomphalement dans le bleu des fonds du Maitre de Moulins... », *Pléiade*, 771.
- 17) « XX. Cérilly. — Encore un nom que j’aurais voulu introduire dans *Allen*. Mais

on sait bien que c'est la ville natale de Charles-Louis Philippe, de Marcellin Desboutsins, et du géographe et explorateur François Péron, dont le nom aurait dû figurer dans la liste des "ducs spirituels". », *Pléiade*, p. 772.

マルセラン・デブータンは画家、版画家、小説家 (1823–1902)、フランソワ・ペロンは地理学者、探検家 (1775–1810)。オーストラリアのペロン半島にはフランソワ・ペロン国立公園がある。

- 18) Béatrice Mousli, *Valery Larbaud, Paris*, Flammarion, 1998, p. 130.
- 19) Cf. *Dictionnaire des lettres françaises, Le XX^e siècle*, édition réalisée sous la direction de Martine Bercot et d'André Guyaux, Paris, Librairie Générale Française, 1998, p. 531.
またギョーマンの業績はMusée Émile Guillauminのサイトにも詳しい。
<http://musee-emile-guillaumin.planet-allier.com/default.htm> (2012年4月11日確認)
- 20) « Philippe en Bourbonnais », in *La Nouvelle Revue Française*, n° 14, 15 février 1910, pp. 207–217.
- 21) Cf. « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 15-17, 1957-1959 et « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 18–24, 1960–1966. すべて Médiathèque Valery Larbaud 所蔵。
- 22) Cf. Agnès Roche, *Émile Guillaumin : un paysan en littérature*, Paris, CNRS, 2006, p. 72.
- 23) « Comme je vous l'ai annoncé par dépêche, Fasquelle accepte le manuscrit de votre roman. Je n'ai pas jugé à propos de lui remettre votre lettre et je lui ai parlé de vous assez brièvement ; mais j'ai enfin arraché la promesse de publier nos deux livres le plus tôt possible et le plus tôt pour lui, c'est la fin de janvier 1911. [...] Nous serons payés plus tard, mais nous paraîtrons à un moment plus favorable ? et nous serons candidats au prix Goncourt pour 1911, qu'en pensez vous ? », « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin (du 18 octobre 1910) », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 15, p. 228.
なお1911年の受賞は Alphonse de Châteaubriant (アルフォンス・ド・シャトーブリアン、1877–1951) の *Monsieur des Lourdines* 『ムツシュー・デルルディース』) だった。
- 24) « Et les livres de notre Émile Guillaumin servent de textes français aux écoliers d'Allemagne et d'Angleterre. », *Pléiade*, 755.
- 25) « Le bourbonnais a le droit d'être fier de vous ! », « Lettres inédites d'Émile Guillaumin à Valery Larbaud », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 23, 1965, p. 54.

- 26) Valery Larbaud, *Allen*, illustré d'eaux-fortes originales par O. Coubine, Paris, Aldes, 1927.
- 27) « Je vous remercie de votre mot. J'ai tenu à vous envoyer ce tirage à part de "Allen" parce que c'est un ouvrage qui est, dans mon esprit, le résumé de mon expérience bourbonnaise, et un hommage au Bourbonnais, et aussi parce que vous y êtes cité. Du reste, on est en train d'en faire une édition de luxe, de 120 exemplaires, et j'ai obtenu de l'éditeur 14 exemplaires hors commerce, nominatifs, dont un vous est destiné. J'espère vous l'envoyer avant le 20 avril. », « Lettres inédites de Valery Larbaud à Émile Guillaumin », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 17, 1959, p. 358.
- 28) « En tout cas je ne puis différer davantage l'élémentaire devoir de vous accuser réception de l'exempl. [sic] d'*Allen* – d'une si merveilleuse présentation. C'est évidemment le plus beau livre que j'aie jamais eu entre les mains – à titre occasionnel même. Quel joyau de prix pour ma pauvre bibliothèque ! Et de vous quel souvenir précieux pour lequel je ne saurais vous dire assez mon affectueuse reconnaissance ! », in *Bulletin des amis de Charles-Louis Philippe*, n° 23, *op cit.*, p. 54.
- 29) « Je crois donc pouvoir offrir *Allen* en tout premier lieu à mes compatriotes, comme un livre écrit pour eux, et ainsi le confier, avec mon nom, à leur mémoire. », *Pléiade*, p. 774.
- 30) Cf. Michel Ragon, *Histoire de la littérature prolétarienne de langue française*, Paris, Albin Michel, 1986. 邦訳はミシェル・ラゴン『フランス・プロレタリア文学史：民衆表現の文学』、高橋治男訳、東京、水声社、2011年を参考にした。
- 31) « A l'état de projet, et avant d'être entrée, imperceptiblement, au cours des années, dans la période de maturation, la « chose bourbonnaise », *Allen*, aurait pu déjà être définie par ce qu'elle ne serait certainement pas : ni un guide descriptif, ni un roman rustique ou de "mœurs de province", — encore moins un roman historique ou une série de nouvelles. », *Pléiade*, p. 766.

Valery Larbaud : *Allen* et ses camarades bourbonnais

SATÔ, Miyuki

Le sujet de cet article porte sur la relation entre Valery Larbaud (1881-1957) et deux écrivains bourbonnais dans l'oeuvre *Allen* (1929) : Charles-Louis Philippe (1874-1909), né à Cérilly et Émile Guillaumin (1873-1951) à Ygrande.

Allen est un éloge du Bourbonnais (actuellement le département l'Allier dans la région Auvergne), le pays natal de Larbaud. C'est le seul ouvrage que Larbaud a ajouté plus tard au texte des « Notes ». D'abord, il a publié le texte d'*Allen* à deux reprises dans *La Nouvelle Revue Française* en 1927. Puis, il a écrit vingt et un chapitres de « Notes » pour montrer la genèse, le mécanisme et faire des explications complémentaires de son ouvrage. Ces « Notes » sont non seulement des annotations, mais aussi la preuve de l'activité créative de Larbaud.

Dans les recherches sur Larbaud, il est reconnu que l'auteur est « cosmopolite » par ses expériences ; par ses voyages en Europe, ses relations amicales avec des écrivains étrangers, irlandais comme James Joyce (1882-1941) ou latino-américains. Nous pouvons aussi trouver des éléments de son cosmopolitisme dans *Fermina Márquez* (1911) ou *A. O. Barnabooth* (1913). En réalité, il a longtemps évité son pays natal, il écrivait : « Je rentre à Paris » ou « Je vais en province » comme nous trouvons dans *Allen*.

Pourtant, Larbaud a retrouvé les qualités du Bourbonnais en lisant des ouvrages sur la région, comme *L'Ancien Bourbonnais* (3 tomes, 1833-1838) de l'historien bourbonnais Achille Allier (1807-1836). Finalement, il s'est mis à composer *Allen* pour expliquer les vertus de son pays, en citant par exemple des faits historiques à l'ère du duché de Bourbon. En outre, il a mentionné plusieurs fois des ouvrages de Philippe et Guillaumin. Nous pouvons dire que si Larbaud a fait l'éloge du Bourbonnais, c'est grâce à l'amitié et les activités de ses compagnons dans le monde littéraire issus du Bourbonnais. Larbaud conclut ses « Notes » de cette manière : « Je crois donc pouvoir offrir *Allen* en tout premier

ヴァレリー・ラルポー：『アレン』と同郷の作家たち（佐藤 みゆき）

lieu à mes compatriotes, comme un livre écrit pour eux, et ainsi le confier, avec mon nom, à leur mémoire. ». Dans *Allen*, Larbaud offre un autre visage de lui-même : une sorte d'écrivain régionaliste.

（人文科学研究科フランス文学専攻 博士後期課程単位取得退学
（平成23年度））